

2015年9月の関東・東北の水害は人災だ。

小生の母方の祖母は守谷の豪農の出身だった。今から40年ほど前、母が死ぬ前にもう一度だけ守谷に行って見たいと言う話を聞いて、小生はクルマで連れて行くことにした。祖母の岩田家は、貴族員議員の資格を持っているほどの豪農で多くの小作人を雇って米を生産しており、見える限りの水田すべてを所有するほどだったという。利根川には棧橋を所有しており、小貝川と合流するあたりだったようで、水害も多い土地柄だったらしい。祖母は米を運ぶ船に乗せられて、江戸の小名木川に面した祖父の鳥居家に嫁いで来たが、鳥居家は鳥居強右衛門の末裔だった。強右衛門は徳川配下の大名の、足軽程度の地位の低い出身だったらしい。ところが甲斐の武田と徳川・織田連合軍が争った『長篠の戦』の折、志願して徳川へ援軍を求めするために脱出、得意の水泳を駆使して包囲をくぐり、徳川方へ状況を伝えた結果、すぐに援軍の出発が決定されたが、この朗報を持って自陣に帰る途中、武田軍に捕らえられ、拷問の後に殺害されたと伝えられている。その後徳川はこの身分の低かった鳥居家を手厚く優遇したらしい。以降、鳥居家は徳川に従って江戸に移り、その分家は町民となって、本所深川で薬屋を営むこととなった。これが小生の母方というわけである。

本所深川といえば江戸の商業の中心地で、一族から浮世絵師の鳥居清長、また吉良上野介の茶会情報をもたらしたという赤穂浪士の大高源五からの手紙などもあったというが、この辺りは関東大震災の折、大被災地であったため火災に包まれて家もろとも焼けてしまった。小生の子供の頃、庭にボロボロの鉄屑同然の刀があったが、町民でありながら帯刀を許されていた鳥居家が所有していた『虎徹』の脇差しだったと聞かされていた。しかし小生の祖父は金貨・銀貨の類は、逃げるときに庭の池に投げ込んで脱出したため、震災が収まってから池をさらって、この金で再建したという。ところが戦災では更なる被害にあい、結局この土地は後に今の平安閣に売却されてしまった。

★ ★ ★ ★ ★

かなり大きな薬問屋だった鳥居家は小名木川に面しており、そこにはやはり棧橋を所有していた。茨城の穀倉地帯で生産された米は、船に乗せられて利根川、江戸川を経てこの地へ入り、帰りには江戸の諸々の物資やここで薬を仕入れて茨城へ返って行くのが常だったと母から聞いていた。母方の祖母はこの船で、お互いに一度も顔を会わせることもなく、船頭さんに連れられてこの鳥居家に嫁に来たのである。

しかし当時のこととて祖母は、母と弟の叔父が生まれて5~6年で結核にかかり、鎌倉に家を借りてここで療養生活に入った。このために母と叔父はこの守谷の岩田の家に預けられた。守谷が母にとっての第二の故郷となったのはこのためである。そんなわけで老い先短くなってきた母は、急に守谷へ行きたいと言い出したのである。

★ ★ ★ ★ ★

しかし 60 年ぶりでやってきた守谷は。母の記憶だけでは右も左も分からず、何度も人に聞きながら、やっとその末裔の家にたどり着くことが出来たものの、昔とはすっかり変わっていたこともあって、立ち寄ることはなかった。それでも近所には親戚も多く、戦後間もないころに小生の家の下宿していた“貴代子”さんの実家である原田家にも立ち寄った。しかし話は通じたものの、もう顔見知りの者は誰もいなかった。彼女は、すでに神奈川県に嫁いでいたからである。

原田家はあの『土』を著わした長塚節と近い親戚関係にあり、節は近所の国生村、現在の常総市国生の出身であった。節も豪農の出身ではあったが、ここもその昔は『土』にもあるように、小作農による貧しい水田地帯で、たびたび水害に見舞われる土地柄だったのである。そしてこの穀倉地帯を南北につらぬく交通機関として、『関東常総鉄道』があった。もともとは関東鉄道として下館⇄取手間を単線の気動車で運転していたが、その後、茨城県内の鉄道数社と合併されて、**現在では水海道から取手までは複線化された。さらに守谷駅で『つくばエクスプレス』と繋がり、守谷から秋葉原までは、快速で 30 分にまで短縮された。**

★ ★ ★ ★ ★

しかし 2015 年 9 月の不幸な水害は、この利便性から始まったものと言っても過言ではない。明治生まれの母の話では、ここに鉄道が通ったのは大正の初め頃で、もともとはこの鬼怒川と小貝川に挟まれた穀倉地帯で生産された米を運ぶものであったらしい。ところが水海道まで複線化されて利便性が高まると、次第に東京近辺のベッドタウンの性格が顔を覗かせるようになって来た。そしてつくばエクスプレスの開業により、都心部まで 1 時間前後という好立地に生まれ変わることになったのである。しかし今回堤防が破綻した左岸地域は、東側の小貝川にいたるまでほとんどが平坦地で、高台になっているところは、水害のたびに土砂が押し流されてたまり、この土砂で堆積されて高台化したところである。またこうした高台は、すべて、昔からの豪農の住居になっていた。小生の親戚筋に当たる原田の家も、国生の長塚の家も、そして祖母の岩田の実家も、大きな森に囲まれており、周辺より 10m 以上も高台になっている。

一方、昭和以降の人口増加によって住宅地化されたところは、どこも水田を埋め立てて造成された、にわか住宅地が極めて多い。したがって、鬼怒川や小貝川の川底と、ドッコイドッコイの高さである。つまり**もともと高低差をなくして川から水を引いて水田を作りやすくして、出来た土地だったのである。**

★ ★ ★ ★ ★

小生はここに行政の怠慢があったと思う。本来は住宅開発の許可を出してはいけない土地だったと思われるからだ。都内荒川沿いの海拔 0 メートル地帯と同様で、ちょっと越水すれば町は水浸しになる。もし許可を出すなら、その諸条件

を購入者に公表することを業者に義務付けて分譲させるべきだったのだろう。2014年に広島で起こった土砂崩れも同様である。販売するに当たって、こういう危険性があるということを承知した上で購入してもらいべきであったろう。近所に飛行場があったり、新幹線の騒音があったりする事実は、見ればすぐに分かる。しかし高低差はあまり肉眼で見ても分からないし、火山灰土等の土地の持つ特殊性に関しても同様である。家がたくさん出来てあわてて堤防を築堤するのは、国土の保全上は大事なことではあるが、これでは分譲業者も居住者も国頼み、つまり税金頼みで安い分譲地を売買し、築堤後、高価にする錬金術になりかねない。

★ ★ ★ ★ ★

しかしこれよりももっと問題だったのは、市役所の対応の甘さと危機意識の欠如である。気象庁から事前に『自らの命を守る行動をとるようにしてほしい』というメッセージがあったにもかかわらず、鬼怒川の越水を住民から報告されて初めて、そのエリアの避難指示を出したという。しかもそれで舞い上がって、他のことは何もしなかったというのだ。通常であればその下流域全体に避難指示を出してしかるべきであろう。気の効いた市役所職員であれば、近隣の市町村にもこの事態を通知していただろう。筆者は広告代理店に勤務していた。たとえばお得意先から、ここの文字一字を他の文字に改めてほしいという連絡を受ければ、そのメッセージを新聞広告担当、雑誌広告担当、テレビ広告担当、ラジオ広告担当、そしてSPツール担当すべてに、この一文字を直すように指示を出す。そうしてこそ始めて広告費として、まともに請求できるのである。建築物だって同様であろう。このヒサシを10cm 広くしてくれといわれて、そこだけで済む場合もあれば、1階から30階まですべて直さなければならなくなることだってある。

何年も役所に居れば、住民の安全を守るためにこの他にどこへ連絡しなければならないか、瞬時にして行動できなければプロとは言えない。小生はこうした能力不足の職員が多すぎるのが市町村の役場だと思い続けていた。もちろんすべてとは言わない。おおむねの職員はこんなとき不眠不休で作業をやっていることは理解している。しかし鬼怒川にしろ小貝川にしろ、関東では名だたる暴れ川である。下館河川事務所の統計によれば、昭和10年以来鬼怒川では6回、小貝川では10回の氾濫が記録されている。鬼怒川の氾濫はほとんどが台風によるものであるが、小貝川の場合は利根川からの逆流により合流地付近で氾濫したことが3回、梅雨前線によるものが1回ある。地元の市職員であれば、この両河川の危険性を熟知していなければならない。もっと早く避難勧告を出していれば、全国から救援部隊が派遣されずにすんだであろうし、へりで吊り上げるような危険な作業に従事しなくても済んだであろう。2次災害がなかったことが不幸中の幸いであったとも思われるが、救出された人々もおそらく相当な覚悟でへりに吊り上げられたであろう。飼い犬も無事に助かったことも幸いであった。この行為に対して批判的

な書き込みもあったようだが、小生は今や犬や猫は、特に子供や老人にとっては家族同様である。東日本大震災のときも犬がへりにより救出され無事に飼い主のもとへ返される場面もあったが、小生はこの犬を救った海上保安庁の職員に拍手を贈りたい。我々は常に人間以外の生物に対しては無関心であることが多い。しかし冷静に考えれば、すべて生物は命の限り人間同様に一生懸命に生きようとしている。おそらくこの犬を見殺しにしたら、むしろ国民の批判は集中砲火となって噴出したであろう。

★ ★ ★ ★ ★

宮城県大崎市の渋井川の氾濫にしても同じように見える。もともと大崎市の中心街は小牛田(コウタ)だった。小生は若い頃このあたりを仙台を基点にして旅行して歩いたが、新幹線が開業する前の古川は、駅前から静かなエリアだった。ところが新幹線の乗換駅になって、**仙台までの所要時間は 15 分になった**。料金は往復 3,000 円かかるものの、となれば住宅費にお金をかけるか、通勤費にお金をかけるか、計算のしどころである。通勤費が会社から半分支給されるとなれば、1 年で 30 万円、10 年で 300 万円。もし仙台近郊よりも 1,000 万円安く住宅を購入できるとなれば、33 年間の交通費が捻出できる計算である。こんな利便性から水田が埋め立てられて、住宅地化された所も少なくなかったのだろう。小牛田では水害の被害はなかったものの、このあたりは 1000 年以上前から住人が居て、水害の出ない高台に住宅を作って来たのだろう。古川西部の岩出山には古代遺跡もあるが、ここは数千年前から古代人の住居として居住されていた土地である。日本人の生活が水田耕作から始まって以来、高台に居住するというのは最大の条件だった。それが車椅子の問題や、種々の利便性から平坦なところを居住地とする習慣ができてしまったが、今回の水害は、今年の広島のと合わせて、人間がどこへ居住すべきかをもう一度問いかけているように見える。そして役所の役割の重要さを暗示している。

★ ★ ★ ★ ★

東日本大震災が起こったとき都心部の超高層マンションのエレベーターはすべて止まった。超高層の揺れはゆっくりではあるものの、揺れ幅は相当大きく何とも不気味である。こうした超高層マンションの上層部は値段も高価で、若い人にはそうそう購入できる代物ではない。しかし図らずもお金持ちのお年寄りも、このときばかりは超高層の恐怖をそれなりに感じたことと思う。エレベーターが止まれば 10 階以上の人たちはほとんど孤立状態になる。買い物に行くのもつらい、これで水が止まれば、トイレにも行けなくなる。その結果軽井沢の分譲地がよく売れたことは先にも述べたとおりである(05-12)。住宅にはさまざまなものが求められる。利便性も大事だろうし、眺望もあるに越したことはない。通勤時間も大事な条件である。しかし最も大事なことは安全性の一語に尽きるのだろう。このことを許認可に当たる行政もけして忘れてはならないと思う。